

特集

ここまで来た！ 腎盂・尿管癌診療

エキスパートが語る臨床の最前線

企画にあたって

2014年版腎盂・尿管癌診療ガイドラインの疫学総論の冒頭には、「腎盂・尿管癌は、同じ尿路上皮から発生する膀胱癌に比し稀であり、全尿路上皮腫瘍の約5%を占めるとされている」とあります。では、実臨床において、われわれ泌尿器科医は腎盂・尿管癌をまれな疾患であると認識しているでしょうか。国立がん研究センターがん情報サービス院内がん登録の集計結果を見てみますと、2012～2013年の膀胱癌の登録数1万6091人に対して腎盂・尿管癌は6775人と、腎盂・尿管癌は尿路上皮腫瘍の実に約3割を占めています。決して稀ではない腎盂・尿管癌を含めた進行性尿路上皮癌に対する治療戦略に、近年paradigm-shiftが生じています。ペムブロリズマブ・アベルマブ・エンフォルトマブ ベドチン・ニボルマブなど、次々と新規薬剤が登場しており、改めてエビデンスを見つめ直す時期に来ていると考え、腎盂・尿管癌診療の最前線にフォーカスを当てたタイムリーな企画を立案しました。

診断編ではmolecular subclassification, UroVision[®], photodynamic diagnosisの現状と将来性、また2021年8月に発刊された腎盂・尿管癌・膀胱癌取扱い規約第2版のポイントをわかりやすくお示しいただいております。治療編ではリンパ節郭清、周術期補助療法、転移性癌に対する薬物療法のup to dateな情報を詳細に解説いただいております。

現在、腎盂・尿管癌診療ガイドラインの改訂作業が進められています。その過程で、第一線で活躍されている10名の先生に最新のエビデンスを丁寧にご解説いただき、極めて完成度の高い特集になったと自負しております。本企画が読者の皆様にとりまして、日々の腎盂・尿管癌の診療に少しでもお役に立てば、企画者にとりまして望外の喜びです。

聖マリアンナ医科大学
腎泌尿器外科学

菊地 栄次